



# 文字禍

中島敦



青空文庫



青空  
文庫

文字の靈れいなどというものが、一体、あるものか、どうか。

アツシリヤ人は無数の精靈を知っている。夜、闇やみの中を跳梁ちようりようするリル、その雌めすのリリツ、疫病えきびようをふり撒まくナムタル、死者の靈エテインム、誘拐ゆうかい者ラバス等など、数知れぬ悪靈あくりよう共がアツシリヤの空に充みち満ちている。しかし、文字の精靈については、まだ誰だれも聞いたことがない。

その頃——というのは、アシウル・バニ・アパル大王の治世第二十一年目の頃だが——ニネヴェエの宮廷に妙な噂うわさがあつた。毎夜、図書館の闇の中で、ひそひそと怪しい話し声がするという。王兄シヤマシユ・シユム・ウキンの謀叛むほんがバビロンの落城しずでようやく鎮まつたばかりのこととて、何かまた、不逞ふていの徒の陰謀いんぼうではないかと探つてみたが、それらしい様子もない。どうしても何かの精霊どもの話し声に違ちがいがない。最近に王の前で処刑しよけいされたバビロンからの俘囚ふしゆう共の死霊の声だろうという者もあつたが、それが本当でないことは誰にも判わか

る。千に余るバビロンの俘囚はことごとく舌を抜いて殺され、その舌を集めたところ、小さな築山つぎやまが出来たのは、誰知らぬ者のない事実である。舌の無い死霊に、しやべれる訳がない。ほしうらない ようかんぼく星占や羊肝卜で空しく探索したむな たんさく後、これはどうしても書物共あるいは文字共の話し声と考えるより外はなくなつた。ただ、文字の霊（といふものが在るとして）とはいかなる性質をもつものか、それが皆目判らない。かいもくアシユル・バニ・アパル大王はきよがんしゆくはつ巨眼縮髪の老博士ナブ・アヘ・エリバを召して、この未知の精霊についての研究を命じたもうた。

その日以来、ナブ・アへ・エリバ博士は、日ごと問題の図書館（それは、その後二百年にして地下に埋没し、更に二千三百年にして偶然発掘される運命をもつものであるが）に通つて万巻の書に目をさらしつゝ研鑽に耽つた。両河地方では埃及と違つて紙草を産しない。人々は、粘土の板に硬筆をもつて複雑な楔形の符号を彫りつけておつた。書物は瓦であり、図書館は瀬戸物屋の倉庫に似ていた。老博士の卓子（その脚には、本物の獅子の足が、爪さえそのままに使われている）の上には、毎日、累々たる瓦の山がうずたかく積

まれた。それら重量ある古知識の中から、彼は、文字の靈についての説を見出そうとしたが、無駄であつた。文字はボルシツパなるナブウの神の司りたもう所とより外には何事も記されていないのである。文字に靈ありや無しやを、彼は自力で解決せねばならぬ。博士は書物を離れ、ただ一つの文字を前に、終日それと睨めつこをして過した。卜者は羊の肝臓を凝視することによつてすべての事象を直観する。彼もこれに倣つて凝視と静観とによつて眞実を見出そうとしたのである。その中に、おかしな事が起つた。一つの文字を長く

見詰めていゝる中に、いつしかその文字が解体して、意味の無い一つ一つの線の交錯こうさくとしか見えなくなつて来る。単なる線の集りが、なぜ、そういう音とそういう意味とを有もつことが出来るのか、どうしても解わからなくなつて来る。老儒ろうじゆナブ・アへ・エリバは、生れて初めてこの不思議な事実を発見して、驚おどろいた。今まで七十年の間当然と思つて看過していたことが、決して当然でも必然でもない。彼は眼めから鱗こけらの落ちた思がした。単なるバラバラの線に、一定の音と一定の意味とを有たせるものは、何か？　ここまで思い到いたつた時、老博士



は躊躇なく、文字の靈の存在を認めた。魂たましいによつて統べられない手・脚・頭・爪・腹等が、人間ではないように、一つの靈がこれを通べるのでなくて、どうして単なる線の集合が、音と意味とを有つことが出来ようか。

この発見を手始めに、今まで知られなかつた文字の靈の性質が次第に少しずつ判つて来た。文字の精靈の数は、地上の事物の数ほど多い、文字の精は野鼠のねずみのようこに仔を産んで殖ふえる。

ナブ・アへ・エリバはニネヴェの街中を歩き廻まわつて、最近に文字を覚えた人々をつかまえては、根気よく

一々尋ねた。文字を知る以前に比べて、何か変つたよ  
 うなところはないかと。これによつて文字の靈の人間  
 に対する作用を明らかはたらきにしようというのである。さて、  
 こうして、おかしな統計が出来上つた。それによれば、  
 文字を覚えてから急に蝨しらみを捕るのが下手へたになつた者、  
 眼ほこりに埃が余計はいるようになった者、今まで良く見え  
 た空の鷺わしの姿が見えなくなつた者、空の色が以前ほど  
 碧あおくなくなつたという者などが、圧倒あつとうてき的に多い。「文字  
 ノ精ガ人間ノ眼ヲ喰イアラスコト、猶なお、蛆虫うじむしガ胡桃くるみノ  
 固からキ殻うがヲ穿チテ、中ノ実ヲ巧たくみニ喰イツクスガ如シ」と、

ナブ・アへ・エリバは、新しい粘土の備忘録に誌しるした。文字を覚えて以来、咳せきが出始めたという者、くしゃみが出るようになって困るといふ者、しゃつくりが度々出るようになった者、下痢げりするようになった者なども、かなりの数に上る。「文字ノ精ハ人間ノ鼻・咽喉のど・腹等ヲモ犯スモノノ如シ」と、老博士はまた誌した。文字を覚えてから、にわかには頭髪うすの薄くなった者もいる。脚の弱くなった者、手足の顫ふるえるようになった者、顎あごがはずれ易やすくなった者もいる。しかし、ナブ・アへ・エリバは最後にこう書かねばならなかった。「文字ノ害

タル、人間ノ頭脳ヲ犯シ、精神ヲ痲痺セシムルニ至ツテ、スナワチ極マル。」文字を覚える以前に比べて、職人は腕が鈍り、戦士は臆病になり、獵師は獅子を射損うことが多くなつた。これは統計の明らかに示す所である。文字に親しむようになつてから、女を抱いても一向楽しゆうなくなつたという訴えもあつた。もつとも、こつと言出したのは、七十歳を越した老人であるから、これは文字のせいではないかも知れぬ。ナブ・アヘ・エリバはこつ考えた。埃及人は、ある物の影を、その物の魂の一部と見做しているようだが、文字は、そ

の影のようなものではないのか。

獅子という字は、本物の獅子の影ではないのか。それで、獅子という字を覚えた獵師は、本物の獅子の代りに獅子の影を狙い、女という字を覚えた男は、本物の女の代りに女の影を抱くようになるのではないか。文字の無かつた昔、ピル・ナピシユチムの洪水以前には、よろこ喜びもちえ智慧もみんな直接に人間の中にはいつて来た。今は、文字の薄被をかぶつた喜びの影と智慧の影としか、我々は知らない。近頃人々は物憶えが悪くものおぼなつた。これも文字の精の悪戯である。人々は、もは

や、書きとめておかなければ、何一つ憶えることが出来ない。着物を着るようになって、人間の皮膚が弱く醜みにくくなつた。乗物が発明されて、人間の脚が弱く醜みにくなつた。文字が普及ふきゆうして、人々の頭は、もはや、働かなくなつたのである。

ナブ・アへ・エリバは、ある書物狂きやうの老人を知っている。その老人は、博学なナブ・アへ・エリバよりも更に博学である。彼は、スメリヤ語やアラメヤ語ばかりでなく、紙草パピルスや羊皮紙に誌された埃及文字まですらすらと読む。およそ文字になつた古代のことで、彼の知

らぬことはない。彼はツクルチ・ニニブ一世王の治世  
第何年目の何月何日の天候まで知っている。しかし、  
今日きょうの天気は晴か曇くもりか気が付かない。彼は、少女サビ  
ツツがギルガメシュなぐさを慰めた言葉をも諳そらんじている。し  
かし、息子むすこをなくした隣人りんじんを何と言つて慰めてよいか、  
知らない。彼は、アダツド・ニラリ王ヌルキの後、サンムラ  
マツトいしやうがどんな衣装を好んだかも知っている。しかし、  
彼自身が今どんな衣服を着ているか、まるで気が付い  
ていない。何と彼は文字と書物とを愛したのであろう！  
読み、諳んじ、愛撫あいぶするだけではあきたらず、それ

を愛するの余りに、彼は、ギルガメシュ伝説の最古版の粘土板を嚙かみくだ砕き、水に溶とかして飲んでしまったことがある。文字の精は彼の眼を容赦ようしやなく喰い荒あらし、彼は、ひどい近眼である。余り眼を近づけて書物ばかり読んでいるので、彼の鷲形の鼻の先は、粘土板と擦すれ合つて固い胼胝たごが出来ている。文字の精は、また、彼の脊骨せぼねをも蝕むしばみ、彼は、臍へそに顎のくつつきそうな偃偃せむしである。しかし、彼は、恐おそらく自分が偃偃であることを知らないであろう。偃偃という字なら、彼は、五つの異つた国の字で書くことが出来るのだが。ナブ・アへ・



エリバ博士は、この男を、文字の精霊の犠牲者の第一に数えた。ただ、こうした外観の惨めさにもかかわらず、この老人は、実に——全く羨ましいほど——いつも幸福そうに見える。これが不審といえ、不審だったが、ナブ・アへ・エリバは、それも文字の霊の媚薬のごとき奸猾な魔力のせいと見做した。

たまたまアシユル・バニ・アパル大王が病に罹られた。侍医のアラッド・ナナは、この病軽からずと見て、大王のご衣裳を借り、自らこれをまとうて、アツシリヤ王に扮した。これによつて、死神エレシユキガルの眼を

欺き、病を大王から己の身に転じようというのである。

この古来の医家の常法に対して、青年の一部には、不信の眼を向ける者がある。これは明らかに不合理だ、エレシユキガル神ともあろうものが、あんな子供瞞しの計に欺かれるはずがあるか、と、彼等は言う。碩学ナブ・アへ・エリバはこれを聞いて厭な顔をした。青年等のごとく、何事にも辻褄を合せたがることの中には、何かしらおかしな所がある。全身垢まみれの男が、一ヶ所だけ、例えば足の爪先だけ、無闇に美しく飾っているような、そういうおかしな所が。彼等は、神秘

の雲の中における人間の地位をわきまえぬのじや。老博士は浅薄せんぱくな合理主義を一種の病と考えた。そして、その病をはやらせたものは、疑もなく、文字の精霊である。

ある日若い歴史家（あるいは宮廷の記録係）のイシュデイ・ナブが訪ねて来て老博士に言った。歴史とは何ぞや？ と。老博士が呆あきれた顔をしているのを見て、若い歴史家は説明を加えた。先頃のバビロン王シヤマシユ・シユム・ウキンの最期さいごについて色々な説がある。自ら火に投じたことだけは確かだが、最後の

一月ほどの間、絶望の余り、言語に絶した淫蕩いんとうの生活を送ったというものもあれば、毎日ひたすら潔斎けっさいしてシヤマシユ神に祈り続けたというものもある。第一の妃ひただ一人と共に火に入ったという説もあれば、数百の婢妾ひしやうを薪まきの火に投じてから自分も火に入ったという説もある。何しろ文字通り煙けむりになったこととて、どれが正しいのか一向見当がつかない。近々、大王はそれらの中の一つを選んで、自分にそれを記録するよう命じたもうであろう。これはほんの一例だが、歴史とはこれでいいのであろうか。

賢明な老博士が賢明な沈黙ちんもくを守っているのを見て、

若い歴史家は、次のような形に問を変えた。歴史とは、昔、在った事柄ことをいうのであろうか？ それとも、粘土板の文字をいうのであろうか？

獅子狩がりと、獅子狩の浮彫うきぼりとを混同しているような所がこの問の中にある。博士はそれを感じたが、はつきり口で言えないので、次のように答えた。歴史とは、昔在った事柄で、かつ粘土板に誌しるされたものである。

この二つは同じことではないか。

書洩かきもらしは？ と歴史家が聞く。

書洩らし？ 冗談じょうだんではない、書かれなかつた事は、

無かつた事じゃ。芽の出ぬ種子たねは、結局初めから無かつたのじゃわい。歴史とはな、この粘土板のことじゃ。

若い歴史家は情なさそうな顔をして、指し示された瓦を見た。それはこの国最大の歴史家ナブ・シヤリム・シユヌ誌す所のサルゴン王ハルデア征討せいとうこう行の一枚である。話しながら博士の吐き棄すてた柘榴ざくろの種子がその表面きたなに汚きたならしくくつついている。

ボルシツパなる明智の神ナブウの召使めしつかいたもう文字

の精霊共の恐<sup>おそろ</sup>しい力を、イシユデイ・ナブよ、君はまだ知らぬとみえるな。文字の精共が、一度ある事柄を捉<sup>とら</sup>えて、これを己の姿で現すとすると、その事柄はもはや、不滅<sup>ふめつ</sup>の生命を得るのじや。反対に、文字の精の力ある手に触<sup>ふ</sup>れなかつたものは、いかなるものも、その存在を失わねばならぬ。太古以来のアヌ・エンリルの書に書上げられていない星は、なにゆえに存在せぬか？ それは、彼等がアヌ・エンリルの書に文字として載<sup>の</sup>せられなかつたからじや。大マルズツク星（木星）が天界の牧羊者（オリオン）の境を犯せば神々の怒<sup>いかり</sup>が

降くだるのも、月輪の上部に蝕しよくが現れればフモオル人が禍を蒙こうむるのも、皆みな、古書に文字として誌しされてあればこそじゃ。古代スメリヤ人が馬という獣けものを知らなんだのも、彼等かれらの間に馬という字が無かつたからじゃ。この文字の精霊の力ほど恐ろしいものは無い。君やわしらが、文字を使つて書きものをしとるなどと思つたら大間違ちがい。わしらこそ彼等文字の精霊にこき使つかわれる下僕しもべじゃ。しかし、また、彼等精霊の齎もたらす害がいも随分ずいぶんひどい。わしは今それについて研究中だが、君が今、歴史を誌した文字に疑を感じるようになったのも、つま



りは、君が文字に親しみ過ぎて、その靈の毒氣どつきに中あたつたためであろう。

若い歴史家は妙な顔をして帰って行つた。老博士はなおしばらく、文字の靈の害毒があゆういの有為な青年をも害そこなおうとしていることを悲しんだ。文字に親しみ過ぎてかえつて文字に疑を抱くことは、決して矛盾むじゆんではないい。先日博士は生来の健啖けんたんに任せて羊の炙肉あぶりにくをほとんど一頭分も平らげたが、その後当分、生きた羊の顔を見るのも厭になつたことがある。

青年歴史家が帰つてからしばらくして、ふと、ナブ・

アへ・エリバは、薄くなつた縮れつ毛の頭を抑えて考  
え込んだ。今日は、どうやら、わしは、あの青年に  
向つて、文字の霊の威力を讚美しはせなんだか？ い  
まいましたことだ、と彼は舌打をした。わしまでが文  
字の霊にたぶらかされておるわ。

実際、もう大分前から、文字の霊がある恐しい病を  
老博士の上に齎していたのである。それは彼が文字の  
霊の存在を確かめるために、一つの字を幾日もじつと  
睨み暮した時以来のことである。その時、今まで一定  
の意味と音とを有つていたはずの字が、忽然と分解し

て、単なる直線どもの集りになつてしまつたことは前に言つた通りだが、それ以来、それと同じような現象が、文字以外のあらゆるものについても起るようになった。彼が一軒けんの家をじつと見ている中に、その家は、彼の眼と頭の中で、木材と石と煉瓦れんがと漆喰しつくいとの意味もない集合に化けてしまふ。これがどうして人間の住む所でなければならぬか、判らなくなる。人間の身体からだを見ても、その通り。みんな意味の無い奇怪きかいな形をした部分部分ぶんせきに分析ぶんせきされてしまふ。どうして、こんなかっこう恰好かっこうをしたものが、人間として通つていいのか、ま

るで理解できなくなる。眼に見えるものばかりではない。人間の日常の営み、すべての習慣が、同じ奇体な分析病のために、全然今までの意味を失ってしまった。もはや、人間生活のすべての根柢こんていが疑わしいものに見える。ナブ・アへ・エリバ博士は気が違いそうになって来た。文字の霊の研究をこれ以上続けては、しまいとその霊のために生命をとられてしまうぞと思った。彼は怖こわくなつて、早々に研究報告を纏まとめ上げ、これをアシユル・バニ・アパル大王に献けんじた。但ただし、中に、若干の政治的意見を加えたことはもちろんである。武の国

アツシリヤは、今や、見えざる文字の精霊のために、全く蝕まれてしまった。しかも、これに気付いている者はほとんど無い。今にして文字への盲目的崇拜を改めずんば、後に臍を噬むとも及ばぬであろう云々。

文字の霊が、この讒謗者をただで置く訳が無い。ナブ・アへ・エリバの報告は、いたく大王のご機嫌を損じた。ナブウ神の熱烈な讃仰者で当時第一流の文化人たる大王にしてみれば、これは当然のことである。老博士は即日謹慎を命ぜられた。大王の幼時からの師傅たるナブ・アへ・エリバでなかつたら、恐らく、生きなが

らの皮剥かわはぎに処せられたであろう。思わぬご不興がくぜんに愕然がくぜんとした博士は、直ちに、これが奸譎かんけつな文字の靈の復讐ふくしゅうであることを悟さとった。

しかし、まだこれだけではなかつた。数日後ニネヴェ・アルベラの地方を襲おそった大地震だいじしんの時、博士は、たまたま自家の書庫の中にいた。彼の家は古かつたので、壁かべが崩れ書架しよかが倒たおれた。夥おほしい書籍しよせきが——数百枚の重い粘土板くずが、文字共の凄まじい呪のろいの声と共にこの讒謗ざんぼう者の上に落ちかかり、彼は無慙むざんにも圧死した。

(昭和十七年二月)





文字禍  
中島 敦 著

[\[青空文庫図書カード\]](#)

底本：「ちくま日本文学全集 中島敦」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年7月20日第1刷発行

底本の親本：「中島敦全集 第一巻」筑摩書房

1987（昭和62）年9月

※ 底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：野口英司

校正：野口英司、富田倫生

1997年11月17日公開

2004年2月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.8(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ